

第239回くらしの植物苑観察会 2019年2月23日(土)

くらしの中に息づく植物

—植物と色—

天野 誠 (千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

はじめに

世界は色であふれている。人は、百万の色を識別できるという。多くの物の色は、色素色だが、構造色という物の構造による色もある。虹や見る角度で色が変わるタマムシの翅・モルフォ蝶の羽の金属光沢の青がその代表である。

色素には、大きく分けて、染料と顔料がある。染料は基本的に水溶性で、それを媒染剤で色留めする。一方顔料は主として鉱物の粉であって、粘り気があり、後に固まるものに混ぜて塗布する。日本画の顔料のにかわ、漆器の色漆のうるしがその代表である。

色の表現は、各民族によって大きく異なる。今回は日本の伝統色を染料とたとえの色の両面から解説する。

染料としての植物

多くの植物の色は、染料として利用できない。それは染めることはできても、色留めができないからである。緑を代表するクロロフィル、赤や紫を示すアントシアン、黄色系の色を示すカロチノイドは、いずれも色留めができない。これらの色素からなる色は、たとえの色になる。

鮮やかな色に染めることができる植物(動物)は、非常に限られている。また、色によって高貴な人のみが着ることができる色もあれば、庶民的な色もある。中でも、ムラサキは、非常に複雑で、植物のムラサキの根(紫根)から染める本紫は、濃く染めるには、多くの染料が必要となる。現在ムラサキは、絶滅危惧植物であり、昔も非常に量を採集するのが困難な野生植物であった。そのため、濃い紫色は、限られた人のみが着る事を許された。古代は、一目でその人の身分がわかったのである。高価で貴重な紫の色を出すために、様々な工夫がなされた。二藍は、藍染めの上に濃い紅花染めをすることで、紫を作り出した。また、織り色の二藍もある。

赤は、貴重な色の1つで、染める原料の色で、色の名前が異なる。代表的な赤を染める原料が紅花である。紅花の花には、水溶性の黄色の色素とカルタミンという真紅の色素が含まれている。朝露に濡れる頭花から、小花のみを採集するのは過酷な労働である。黄色い色素を流して、紅のみを残した物が、紅花の餅である。また、さらに純度を高めると最高級の口紅になる。良品は緑色がかかったという表現がされる(ハマグリの貝殻に盛られて流通していた。茜色は、アカネの根から採集されたアリザニンという



ベニバナの花

色素から染める黄色みがある赤色である。アカネそのものは、珍しくない野生植物だが、その根を大量に掘り集めるのは、重労働である。蘇芳色は、熱帯のマメ科の木で、ジャケツイバラの仲間、スオウの木材の芯から取れる色である。やや紫色がかかった赤色である。輸入品だったから、古代では非常に高価だったが、江戸時代はかなり普通に流通するようになった。



アイ

青は、概ねアイで染められる。藍は日本本土ではタデ科のアイの葉から採集される。採集されたアイは発酵させられて、「すくも」となる。これがかますに詰められて流通する。手間がかかっても大量に栽培できる藍は庶民の色である。昔は、紺屋という職業があり、そこで、白地の布や糸が染められた。紺屋の仕事場には、いくつもの藍甕があり、すくもを入れて、発酵の具合を調整し、手をかけて、染色できる状態を作り出す。

藍は、一回染めてから、再度藍甕に漬けることで、順次色を濃くすることができる。漬ける手間はかかるが、比較的安価に濃い色を染めることができる。インディゴは様々な植物から採取することができる。琉球の藍はキツネノマゴ科のリュウキュウアイから、インドの藍はマメ科のコマツナギの仲間から、ヨーロッパの藍は、アブラナ科のタイセイイ（大青）から採取される。現在では、インディゴは、合成されている。

黄色も、染める原料の色で、色の名前が異なる。イネ科のカリヤスの葉や茎から採取される刈安は、代表的な染色である。黄八丈の黄色は、イネ科コブナグサから染める。アカネ科のクチナシの果実から取れる山梔子色も、多く使われた。鬱金色はまさにカレーの色である。カレーの染みが落ちにくいのは優秀な染料だからである。

緑は、一つの染料で染める事ができない。青と黄色の染料で重ね染めするか、糸染めして、織り色で表現する。

黒は、もっぱらタンニンを含んだ鉄で媒染することで、染色する。タンニンは、対捕食者戦略で、多くの植物に含まれている。古代では、ブナ科のクヌギやコナラの樹皮を使ったつるばみ色、江戸時代は、ヤマモモ科のヤマモモの樹皮を使った憲法色などがある。

色のたとえとしての植物

基本的な染料による色の組み合わせで、様々な濃さ、色調の色が生じる。それを相互に理解するために、様々な植物の名前が使われた。

花の名前から取ったものは、非常に多い。紫色系統では、藤色、菖蒲色、堇色など、濃淡・色調の違いが表現されている。赤系統の色では、桃色、牡丹色、バラ色、なでしこ色などがある。ナデシコの仲間は英語では、Garden Pink とその物の名前と呼ばれる。青系統の色は、植物にあまり青い花のものがないので、数は少ない。つき色は、ツユクサの花の色を示すことばである。興味深いことに、ツユクサの園芸品種であるオオボウシバナからは、水溶性の色素（コンメリニン）が取れる。これを何度も染み込ませて作るのが、「青紙」である。「青紙」は水に漬けて、色素を取り出し、手書き友禅の下絵を描くのに用いられる。下絵通りに染色した後、水で洗えば、下絵の色素は水溶性なので、溶けてなくなるのである。黄色系統では、山吹色、菜の花色などがある。

葉の名前から取ったものには、柳色、若草色、松葉色、紅葉色などがある。

実から取った物には、レモン色、茄子紺、芥子色などがある。

たとえの色には、その国の植物相が反映されており、突き詰めると、とても興味深い。

.....

次回予告 第240回くらしの植物苑観察会 2019年3月23日（土）

「鍋島茂義の植物学」荒木 和憲（当館研究部准教授）

13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要